

興福寺西金堂伝来八部衆立像の尊名について

吉村 稔子 (神田外語大学)

興福寺西金堂伝来の八部衆立像は、734年(天平6)に光明皇后の発願によって建立された西金堂に安置されていた仏像群の遺例であり、『金光明最勝王経』夢見金鼓懺悔品の経変を構成していたことが知られている。本発表では、西金堂像と同経所説の八部衆の尊名とを対照させることにより、各像の造像当初の尊名を明らかにすることを試みたい。

義浄訳『金光明最勝王経』(703年)および慧沼(-714年)述『金光明最勝王経疏』によれば、八部衆の尊名は天子、香象王、葉叉、掲路荼、犍闥婆、阿蘇羅、緊那羅、莫呼洛伽となる。慧沼によれば、余の経で竜王といわれているものが此の経では象王といわれているといい、西金堂像には竜王が存在しないことから、慧沼の経疏に依拠していると考えられる。なお八部衆は、北涼・曇無讖訳の四卷本および隋・宝貴による八卷本にはみえず、唐・義浄訳の十卷本において初めて揃って登場する。インドではプタ朝以降ヒンドゥー教が盛んになるなか、釈尊の説法を聴聞するため異教の神々が参集するという増広には、仏教の優位を主張する意図があったと考えられる。

さて、八部衆の筆頭である天子(Devaputra)とはどの像か。夙に指摘されているように、中央アジアから中国にみられるヒンドゥー三神の図像は、後世のアスラの図像の起源となった。問題となるのは、アスラに転用された時期である。5世紀の雲岡石窟第10窟にはいわゆる須弥側阿修羅王図が存するが、私見によれば、これはインドの天地創造神話を主題とする図像と考えられ、日月を掲げる多臂の神をアスラとみなすことは正しくない。八部衆像の古例とされる7世紀のキジル石窟第224窟の仏説法図では仏の傍らに日月を掲げる多臂の神がみえるが、同様の神は第181窟の仏説法図では仏の両側で牛にのる姿と鳥にのる姿で表されている。他方、善無畏系の胎蔵図像のなかの阿素羅種族は一面二臂に表されており、アスラであることが確実な図像を知ることができる。管見によれば、8世紀以前の日月を掲げる多臂像に、アスラと特定しうる作例を見出すことはできない。従って、西金堂像のなかの天子とは、異教の高位の神の姿をした多臂像であるとする私見を新たに提示したい。

次に、竜王に代わる香象王とは、その名前から象皮を被る像と推測され、葉叉とは「毘沙門天王を上首となす」(『金光明最勝王経』)ことから、毘沙門天眷属のなかに表されることのある獅子皮を被る像と推測される。この図像は後世ガンダルヴァとみなされるようになるが、仏典の所説によれば犍闥婆は牛頭あるいは牛身であり、胎蔵図像では被り物をつけない人身に表されている。以下、掲路荼を鳥頭の像、緊那羅を一角の像、莫呼洛伽を大蛇を頂く像とすることは通説に従い、のこる犍闥婆を瞋目の像、阿蘇羅を炎髪の像に比定して、結論としたい。

西金堂像は、各尊像が明確な図像上の特徴を有する、完成された八部衆図像を示すことに特徴があるといえよう。